

会 議 記 録

会議名称	第2回社会教育委員の会議
日 時	令和4年9月1日（木）午後1時00分～午後2時59分
場 所	分庁舎5階 会議室A（オンライン会議）
出席者	委員 塩練、小澤、荻上、南、檜枝、赤池、天野、内山、笹井 区側 生涯学習担当部長（教育委員会事務局次長）、生涯学習推進課長、 社会教育センター所長、社会教育推進担当係長（社会教育主事）、 教育連携担当係長（社会教育センター社会教育主事）、管理係長、 管理係主査、教育連携担当係職員
配付資料	<配付資料> 1 令和4年度第1回社会教育委員の会議 会議記録（案） 2 令和3年度社会教育調査の中間報告について <参考資料> 1 「これからの社会教育モデル」 2 「こむすびと（Co-Mu-Su-Be-To）」 3 令和4年度 杉並区の教育 4 すぎなみ大人塾2021記録集 5 青少年委員だより 第79号 6 杉並区スポーツ推進計画「健康スポーツライフ杉並プラン」 7 とうきょうの地域教育 No.146 8 なみすく 2022夏号 ・社会教育主事・社会教育士に関する参考資料
会議次第	I 報告事項 1 会議録の確認について 2 令和3年度社会教育調査の中間報告について II 協議事項 1 杉並区教育ビジョン2022推進計画を基にした社会教育の支援方 策について 2 次回について

(意見要旨)

○生涯学習担当部長 挨拶

I 報告事項

○社会教育推進担当係長（社会教育主事） 令和3年度文部科学省社会教育調査の中間報告が公表されました。社会教育行政の基礎的事項を明らかにすることを目的として、行政調査、公民館、図書館、博物館、青少年教育施設、女性教育施設、体育施設、劇場、音楽堂等、生涯学習センター調査の9項目に沿って実態を把握しております。概況を申し上げますと公民館や社会体育施設は減少し、前回調査から図書館、博物館、生涯学習センターは増加して、過去最多になりました。設置、運営状況として公立の社会教育施設のうち、指定管理者の導入が施設全体の3割程度になっています。専門職に関しては、指導系の職員について、現在は社会教育主事の養成課程上、社会教育士の養成とイコールになる社会教育主事が数字上では減少傾向です。図書館司書、博物館学芸員、社会体育施設、劇場、音楽堂の指導系職員は増加しています。社会教育の中核となる公民館だけは減少している状況にあります。また、令和2年度はコロナで緊急事態宣言の発出などの影響により施設利用者数、本の貸出数、貸出回数などは軒並み減少しています。

○議長 社会教育調査は、3年ごとに行われる、いわゆる学校基本調査と並ぶ教育行政の基幹的な調査で、このデータは社会教育行政にとって重要である。一人負け状態の公民館がその状況状態になっているが、この施設には団体、サークルの利用を前提にしている、そういう場が公民館以外にもたくさんあるので、かならずしもそうした活動の場が減っているわけではないことを指摘できる。公民館数が一貫して減ってにせよ、それでも1万数千館を数える施設をどう有効活用していくのかは改めて大きな問題であろう。杉並区に公民館はないが、その代わり団体利用に関わる施設をどのように活性化していくのかを考えていくことで、そこに対して同じ問題を提起することになるのではなかろうか。

II. 協議事項

○生涯学習推進課長 社会教育センターは、現在、改修工事中ですが、来年5月予定のリニューアルオープンに当たり、社会教育士の拠点になっていく必要があると考えています。本日配布資料にある社会教育士のアンケートによりますと、資格保有者のネットワークや継続学習の機会が欲しいということに非常に高い希望が出されています。皆様にご議論いただく中で、こうした拠点のイメージやそこでどのようなことをやっていけば良いかなどが具体的になり、リニューアル後の活動として社会教育センターで進めていきたいと考えています。

○議長 社会教育士の称号資格を持つ人たちをどのように育成、活用していくかが大きなトピックスである。区としても教育ビジョン2022推進計画で、社会教育が持っている特徴、イニシアチブを教育全体に広げていくという趣旨だが、施設や補助金が頭打ちの状態、行政がやるべき施策の中心は人づくり、あるいは人の活用というところになっていると思う。

以前から社会教育というのは、講座・セミナータイプと、グループ・サークルタイプ、集合学習と集団学習の二つに分けられ、集合型・集団型の学習をどう広げていくのかが基本的な形だった。これからの社会教育とい

うのは、社会参加の場面から考えていくことが必要で、孤独や孤立がコロナでますますひどくなり、社会参加、とりわけ外国籍の方や障害を持っている方たちとどうやって共生の関係をつくるのか、社会参加とそこからつながりづくりをどう始めるのかということも視野に入れ、社会教育行政を展開していくべきであると考えている。

社会あるいは地域に参加するには、まず居場所が必要になる。特に若い世代、子育て中の親、パートナーが亡くなった高齢の方々の居場所がなく、みんなが本音でコミュニケーションできるような場を地域に広げていくことが一つの課題としてあると考えている。家に閉じこもっている人、人とつながっていない人が来てみんなでコミュニケーションする、これが社会参加の出発点だと思う。だから、面白そうなイベントに参加してみて、人と触れ合うことが社会参加の第一歩になり、そこで信頼できる仲間が得られ、他者との関係性をつくっていくことが大事であると考えている。

自分がやってみたい活動、自分が困っていることを解決しようと思う活動が社会教育のコア、中核であり、その前提として、信頼できるパートナーシップに基づく良いつながりが必要になり、それをどう生み出していくのが社会教育行政の一つの課題であろう。その課題を共有することで学習課題になり、より強固なつながりで課題が解決し、地域全体がより住みやすくなる。一方で、面白いこと、楽しいこと、文化活動やレクリエーション活動を共同作業で盛り上げていく中で、新しいつながりができ、前向きな価値も出てくる。つながり、関係性、仲間を基軸とした社会教育、社会教育行政が必要で、これが新しい社会教育モデルである。こうした社会参加、仲間づくり、課題を共有して解決のための努力や学ぶこと、面白いこと、楽しいことをみんなで作りに上げるには、調整役、ファシリテーター、促し、促進役が必要になる。社会教育行政をやっていくときに、人が介在して調整、ファシリテーター、プレゼンテーションする機能が必要で、専門家が介在して居場所を機能させる、いい関係性ができるようにする、課題の共有を促す、クリエイティブなレクリエーションや文化活動を生み出し、地域に広げていくのは、社会教育の専門家、ジェネラリストでないとできない。社会教育士を育てて、活躍していただけるかの視点というのはとても大事である。

- 委員 ファシリテーション、コーディネーション、言い換えればちょっとおせっかい、世話役、横につなぐ、コーディネートなどの形で関わるコミュニティそのものを担う役割が、社会教育士の具体的な仕事として実現していけるといい。一方で、仕事にして食べていけないような壁をどう超えていけばいいのかが大きな課題である。

もう一つは、企業で働く人の働き方改革が広がる中で、子どもの貧困、地域の環境活動など本業の仕事とは違う何かを自分の中で意識することが最初の半歩になるのではないかと思う。会社の時間とは違う時間を持てる経験をする中で、ある意味居場所ができてくる。いきなり地域に入っていく、居場所を持つというのは難しいので、ふだんと違うところの時間経験をするとところから入って、会社以外、家庭以外の居場所を持つ形の段階というのがある。個人で企業と一緒に、個として挑戦していける環境をつくる取組をしているが、社会教育士が地域で活動していくためには、社会教育士となる前の段階の人たちが入って来られるような、小さな「出島づ

- くり」をどう応援していけるかが大事ではないか。しかし、ファシリテーターとかコーディネーターとしてかかわるのでは、ハードルが高い。その前に「応援する・される」ことを経験するのが望ましいと思われる。
- 議長 対等な関係性と平等な関係性は違う。上下関係を一定の高さに保つのは平等な関係だが、高さが凸凹でもそれを固定化しないで、時間軸の中でダイナミズムに変えていき、その都度最もふさわしいものにとというのが対等な関係性だと思う。そういう関係性をつくれば、包摂と排除という問題は、徐々に解決していくのではないか。
 - 委員 社会教育士のテーマとか仕事も正解はない世界だからこそ、評価という軸で見ないという意味で応援が大事。
 - 議長 「助けられる・助けられた」経験がない人は人を助けることができず、人を助けた経験がない人は人から助けられることができない。
 - 委員 放課後に卒業生が在校生たちの学習の支援をする。子どもたちがそこで得るものは自己肯定。人から評価されるということではなく、自分自身の中での満足感、肯定感を高めていくことによって、ボランティア的な気持ちというのが育っていく。
 - 委員 社会教育とか社会参加、地域活動みたいなものに入っていき、第一歩、第半歩の障壁が非常に高い。そこを乗り越えると、あとはいろいろな発展がある。
 - 委員 社会教育士の資格を取った方がどういう仕事として採用されることになるのか。地域の人たちが社会教育士にお金を出して、問題を解決するというようなことが起きるだろうか。
 - 議長 ファシリテーションとかコーディネーションは大事だが可視化されない。給料が保証されている人がジェネラリストとして社会教育士の資格を取る、現実的にはそうならざるを得ない部分があると思う。群馬県で多文化共生推進士の資格を県がつくり、群馬大学に委託して履修プログラムをつくった。ほかの仕事を持っていて、資格を持つことで活動の幅、質が高まる。杉並区ではそういう社会教育士のプレゼンスを大きくしていくことがとても大事だというふうに思っている。
 - 社会教育推進担当係長（社会教育主事） いろいろな領域で活動している人が、「その領域×社会教育」の「×社会教育」という機能を加えたがために、プラスアルファで様々なものにも波及するような変化を生んだ事例を追うことの方が、今の仕組みを理解する上で近道になるのではないか。
 - 委員 企業も横型人材の育成に困っている。社員のモチベーションや自己有用感を高めることが結果的に本人の業績とか会社の業績にもつながる。マーケットにならない部分をどう克服するか。企業で社会教育士の資格を持っている人はほとんどいないので、例えば1年間とか行政に出向し、広い意味で社会教育士に関連する行政の仕事の現場を経験して社会教育士の資格を取る。企業からするといろいろな経験をする人材育成の場、杉並区からすると、将来社会教育士として杉並区にかえてきてくれるかもしれない。企業版ふるさと納税を使うことで、財政的負担が少なくて済む。
 - 生涯学習推進課長 社会教育士は資格を持っている人は増えているが、すぐ社会教育士として、いわゆる使い物になるのかということ、それはなかなか難しい。例えば学芸員、司書、教員は、所属してスキルを高めていくこ

とができるが、社会教育士の力を高めていく場所がないのではないか。だから社教センターがいわゆる拠点とならなければいけないのではないか。そこに例えば企業から派遣されて、学びながら力をつけていただいて、企業に戻っていただくというのもあると思う。社会教育士はどんどん輩出されるが、その人たちを一体どうするのか。

- 委員 資格取得した上でも、それで職能として生きていけないという、なかなか経済社会の厳しい世の中でどう両立していくか。たとえば図書館をいかに生かしていくかという観点でも社会教育士を何か活用できるのではないかと思っている。
- 副議長 創造性とかクリエイティブのベースは人間にしかないと言っていた時代が、今大きく変わりつつある。AIが絵も描くし、デザインもするという時代になってきたときに、人間は何をすべきか。機械とかAIではない人と人とのコミュニケーションこそが重要と思う。確かにオンラインだとグローバルに同じテーマを持った人はつながれるが、場の持つ力が非常に重要になってくると思う。社会教育士は、人として、その場において、いろんな人をつなげる、地場にある人が立っている、その状況が非常に求められる。学問の分野も非常に細分化され、全体を見渡す力みたいなものがそげていくのが非常に問題と思う。聞いたら教えてくれる人が地域にいること、AIやロボットが進化すればするほど社会教育士の役割は、これからもっと重要になるのではないか。
- 議長 気づき、クリエイトする情報、アイデア、常に存在していないものを自分の頭の中でぽっと生み出すのが動態的情報と情報論でよく言われる。促すことはできても気づくということがAIにできるのか。気づくためにはある種の、共感、空気感といったものも必要なのではないか。
- 委員 相手の行動から受けるパフォーマンスが、応援と助けるでは違ってくるのではないか。企業に求められる人的管理における社会貢献価値をメリットとして、お金の価値に対価としてしまうことは、「応援する、される」という話と少しセグメントを変えたほうがいいのではないか。ここを混乱させると、その目的、スタートの考え方にズレたものが入り込んでくる危険性があるのではないか。精査してハンドリングしていかないと、動いていくスピードにこっちが追いつかないということになってくる。
- 委員 人とつなぐ仕事としての社会教育士という意味では、地域に根差した社会教育士が必要になってくる。例えば学校現場でもいろんな学習を進めていったときに、どんなふうに地域とつながるか。社会教育士と相談してタイアップして進めていく学習的な展開も見込めるのではないか。
- 生涯学習推進課長 本日も貴重なご意見を頂きまして、ありがとうございます。人ではないとできないのが社会教育士だということはやはり重要な視点なのかなというふうに改めて感じたところでございます。